

灣の海防史」(文學士藤井甚太郎氏)、「鎌倉武士の學問修養」(鷺尾顯敬氏)、「劇に現れたる鎌倉武士」(文學士堀田璋左右氏)、「鎌倉公方と室町幕府」(文學士渡邊世祐氏)、「武相の古美術」(文學士福井利吉郎氏)、「武相の古文書」(文學博士黒坂勝美氏)等あり。加ふるに巻頭二十一葉の寫真版を添へて本文との參看に資し、附圖として武相史蹟地圖一葉を附せり。菊版五〇二頁(仁友社發行、價、二〇〇)〔中村〕

◎ 雜 誌

◎ 我國に保存せられたる古代土耳其文字 文學士中目 覺 (尙古)第七十一號所載)

北海道小樽手宮の洞穴内の岩石に見る文字縊の彫刻に就いては大正二年、島居龍藏氏が、之れを以て古突厥文字にして、其言語はツングース語なるべしと述べしことありしが、著者は露西亞のラドロフ氏の「蒙古に於ける古代土耳其文存」の著を讀み、其文字が手宮の彫刻と類似するを見るに及んで、遂に是等の比較研究を企て、手宮彫刻は古代土耳其文字にして其文字の或るものは之れを横に書けるものもありと判定し、更に其言語に於ては北海道の對岸に位せしツングース人の言語なるべしと推測して、之れを「グルーベ著ゴルテ語集」に求め、手宮の文字縊彫刻を、率ある。

大海。闊ふ。入る。の語なりと判讀し、全文の意は「……我は部下を率ゐ、大海を渡り……闘ひ……此洞穴に入つた……」ならんと指定せり。此言語は滿洲語とオロツコ語との中間に位し、東トングース語に屬するものにして、烏蘇里地方の住民の言語なるべく、著者は之れを鞅鞞語と名け、手宮彫刻は、さきの意味を古代土耳其文字を以て書ける鞅鞞語の文章なりと言へり。〔西田〕

蒙古襲來に就ての研究

八代 國治

(史學雜誌第二十九編第一號所載)

文永弘安の役に關して新に世に出でたる勅仲記原本、弘安四年日記抄、異國御祈文書等の史料に基き研究したるものなり。其中文永役に關しては其來襲を十月十三日なりと、大友賴泰の部下が賊徒五十餘人を捕虜とし、之を具して上洛せりとの新事實を述べ、幕府の異國征伐については鎮西、中國の武士の外、大和國の寺僧と國民とを徵發して頗る大規模に企てられたりと推し、弘安役については賊船は五月廿二日對馬壹岐を侵略し進んで博多沿岸に迫りしが、同時に別隊として多數の船艦を送りて長門沿岸を攻撃したりと事、六月中旬に至り再び敵の船艦對馬島に來着し、更に博多を侵せし事等を述べ尙、捕虜の待遇、戰爭の中心地に論及し、更に身を以て困難に代らんことを伊勢神宮に祈願し給ひとは